

庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土の木製品

三 阪 一 徳*

* 徳島大学大学院総合科学研究部

1. はじめに

本稿では、庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場新営地点）¹の旧河道 S263 から出土した木製品のうち、2014 年度に古環境研究所（現・文化財科学研究センター）により保存処理が実施された 25 点（金原・田中 2017）について、報告をおこなう。樹種の同定結果は別稿（渡邊・金原 2017）に掲載されており、本稿でもその成果を引用している。これ以外の木製品類の同定や器種については、能城修一ら（2017）により報告されている。

表 1 の木製品一覧には、調査所見や器種、時期、樹種などを記載している。実測図は図 1～7 に掲載している²。写真は別稿（金原・田中 2017）を参照されたい。木製品に関する用語は、基本的に『木器集成図録：近畿原始篇』（上原編 1993）に従うものとする。なお、木製品の番号は上記の保存処理・樹種同定の報告に対応する。

2. 木製品の概要

1 は組合せ式高杯の杯部である。水平口縁をもち、端部はわずかに下に垂下する。杯部と水平口縁の屈曲部上面に一条の突帯がめぐる。杯部内面の底は平らである。柄穴は杯部底まで貫通し、縦断面は縦長の長方形、横断面はおおよそ方形である。柄穴には加工痕がみられる。同様の形態的特徴は弥生時代中期に位置づけられる（長友 2009）。また、これに類似した形態をもつ土製高杯は、阿波地域では弥生時代中期中葉前後にみられる（菅原・瀧山 2000）。また、杯部内面の全面に焦げ目が確認される³。横木取りと推定される。樹種はクスノキである。

2 は器種不明である。容器であろうか。平らな底部から、外傾して立ち上がる。立ち上がり部外面に焦げ目がめぐる。樹種はヤマグワである。

3 は泥除の未成品である。柄孔は未穿孔である。平面形は隅丸台形で、縦断面はわずかに内湾するが、ほぼ扁平な板状であり、泥除Ⅲ式（上原編 1993）に分類される。裏面上端部は突出しており、蟻柄となる可能性がある。こういった泥除は弥生時代中期～5 世紀にみられ（上原編 1993）、とくに弥生時代終末期～古墳時代前期に多いとされる⁴。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

4 は狭鋏である。平面形態は縦長の長方形で、頭部から刃部にかけて幅狭になる。柄孔周囲の隆起は、身の周囲から柄孔に向けて徐々に厚みを増す B 型で、平面形態を含めると狭鋏Ⅱ B 式（上原編 1993）

に分類される。柄孔は隅丸方形である。狭鋏Ⅱ式の大半が弥生時代中期後葉以前に属すが、弥生時代後期～5 世紀に属すものも少数存在することが指摘されている（上原編 1993）。身に縦方向と推定される加工痕がみられる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

5 は編み籠である。樹種は広葉樹と草本？である。詳細は別稿で報告予定である。

6 は戈形である。鋒はわずかに広がり、先端は丸みを帯びる。鏑は不明瞭である。胡は開き、円形の穿を 2 つ有する。図面右端のごくわずかに突出する部分が内と推定される。サイズは長さ 24.5cm、幅 5.9cm である。形態的にみて中細形銅戈（宮里 2014）や大阪湾型銅戈 c 類（難波 1986）⁵ をモデルにした可能性が指摘されており、その場合、本資料は弥生時代中期前葉～後葉（岩永 2003）に属する可能性が高い。樹種はヒノキである。

7 は器種不明である。平面形は図面左側から右側にかけて幅を減じ、側面は図面下端がカーブしている。残存部のなかほどに刳込みを有する。柱状片刃石斧の柄、曲柄鋏の柄、鳥形などの可能性がある⁶。柱状片刃石斧の柄と推定される類例として、愛知県朝日遺跡の木製品があげられる（図 8-1、宮腰編 1992）。7 が柱状片刃石斧の柄であった場合、石斧の装着溝はなく未成品となるが、刳込みの裏面に装着溝を設けるほどの厚みはなさそうである。曲柄鋏の柄と考えた場合、刳込みを有さない面が鋏身の装着面と推定され、この部分は一般的に平らであるが、7 の該当部分は丸みを帯びている。鳥形と想定した場合、立体鳥形（A 類）に分類されるが、これに一般的な「頭部と胴部とを区別する削り込み」（上原編 1993）は、7 に確認できない。7 と同様な刳込みをもつ鳥形の事例として、大阪府池上（曽根）遺跡があげられる（図 8-2）。頭部や尾部が写實的に表現されており、刳込みに羽が装着されたと考えられる。また、杵頭を挿入したと想定される孔が施される（小野・奥野 1978、上原編 1993）。一方、7 の残存部には池上遺跡のような頭部・尾部の表現や杵頭を挿入する孔はみられない。なお、心持材が用いられ、樹種はカギカズラ属である。

8 は器種不明である。輪切りにした芯持材の中央部を削り込んで両端を突出させており、平面は I 字形を呈する。図面上端部は断面 V 字形に窪む。加工痕が一部に確認される。藁製品用の編具に伴う木錘の可能性もあるが、8 のように中央の溝幅が広いものはみられない（上原編 1993）。また木錘としては重量が小さいようである。樹種はイヌガヤである。

9 は高杯の脚である。脚柱部上端に水平やや上方に広がる部分が確認され、この部分が杯部下端と考えられる。よって、組合せ式ではなく一木式の可能性が高いといえる。脚台裾端部はわずかに上に肥厚する。脚台部の裏面中央が、平面円形・断面半円形に彫り窪められている。脚台部裏面は全面に無数の傷状の抉れがみられるが、どの段階で生じたものかは不明である。脚台裾端部には焦げ目がめぐる。『木器集成図録：近畿原始篇』（上原編 1993）に示された事例のなかで、類似する形態は弥生時代前期に多く、中期までみられる。なお、横木取りで、樹種はヤマグワである。

10 は横槌である。形態的には渡辺誠（1989）の B 類に分類され、豆打ち用や工具用としての機能が想定されている。ただし、少なくとも現状では身の側面に明確な使用痕はみられない。一方、先端はやや丸みを帯びており、これが使用による摩耗であれば、杵としての機能も想定される（上原編 1993）。心持材が用いられ、樹種はヤブツバキである。

11 は栓である。頭部は釘頭状で、横断面は六角形を呈する。身の縦断面は下端部に向かい厚みを

減じ、横断面は長方形を呈する。身の中位やや下に柄穴を有する。頭部上面に窪みを有し、平面不整形長方形、断面V字形を呈する。頭部と身に縦方向と推定される加工痕がみられる。樹種はヒノキである。

12は曲柄鋏の身である。軸部と刃部の境が明瞭である。刃部幅が肩幅より大きい曲柄平鋏CⅠ式または刃部幅と肩幅が大差ないCⅡ式に分類される（上原編1993）。軸部は端部に向かい細くなり、端部の紐かけは現状で確認できない。曲柄平鋏C式は弥生時代中期前葉～4世紀まで存続するとされる（上原編1993）。なお、刃部が部分的に欠損しているが、欠損部の一部に摩耗がみられ、欠損後も使用されたか、再加工された可能性がある。樹種はイスノキである。

13は広鋏の未成品と考えられる⁷。柄孔は未穿孔である。柄孔周辺の隆起は、幅を減じなら刃部に向かって縦にのびた後、刃部やや上の横方向の隆起とつながり、逆T字形を呈する。刃部は作りだされておらず、鉄製の刃が装着された可能性もある。加工痕が全面にわたり顕著にみられる。隆起の上端付近は、不整半円形に浅く彫り窪められている。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。類例として、愛媛県福音寺遺跡竹ノ下地区の旧河川出土資料があげられる。柄孔は穿孔されているが、刃部は作りだされていない。時期は5世紀頃とされる（図8-3、森・黒崎1983）。同じく愛媛県の前川遺跡や釜ノ口遺跡などで、未成品を含む類例が数点認められる（福岡市埋蔵文化財センター1983）。同様の隆起をもつ他の事例として、奈良県平城京下層遺跡の資料があげられる。平面形は頭部の左右がくびれた縦長の長方形で、刃部が横長の長方形を呈しており、広鋏Ⅵ式に分類される。柄孔周辺の隆起は上が丸く下が尖った舟形の下端がのびたA4型に分類される。縦方向の隆起の下端は、刃部のやや上で横方向の隆起につながり、逆T字形を呈する。刃部は厚みを残す。4世紀後半に位置づけられる（図8-4、上原編1993）。

14は広鋏である。柄孔周辺の隆起は明瞭な段をなすA型である。その平面形は、上下とも均整に尖った紡錘形のA1型または、A1型の下端が長くのびたA2型に相当する（上原編1993）。A1・2型の隆起は弥生時代前期～中期前葉に限定されるという（上原編1993）。身の幅は刃部がもっとも広く、柄孔付近でもっとも狭くなり、頭部付近で再びわずかに広がる。これは広鋏Ⅰ式もしくはⅢ式に分類される。また、泥除装着装置は、直柄平鋏の広鋏身において、柄孔とほぼ同じ高さやや上で、A型突起に接して左右一対の小孔を穿つb類（両脇穿孔型）に区分される（上原編1993）。小孔は正三角形に近く、滋賀県大中の湖南遺跡などで確認される（福岡市埋蔵文化財センター1983）。同様の小孔は弥生時代前期後半に多いようである⁸。さらに、身幅がもっとも狭い部分（柄孔中位もしくは三角形の小孔下半と同じ高さ）の両側辺に、直径8mm程度の半円形の抉りを有する。また、頭部の両側辺に三角形の抉りを有し、頭部上端はU字状に窪む。装飾、泥除装着装置、着柄などの機能が推定される。なお、一辺4mm程度の不整形の孔が、身の中央やや左よりに8.5cm程の間隔で縦方向に3つ並ぶが、人為的なものであるかは不明である。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

15は堅杵である。握部は欠損しており、節帯の有無は不明である。二節式（A類）は割材が多く、単節式（B類）と無節式（C類）は芯持材が多いとされる。15は芯持材が用いられているため、単節式か無節式の可能性が高い。さらに単節式は、搗き部両端から握り部にかけて径を減じ、搗き部と握り部の境界に隆起帯が施される例が多いとされる。15はこれに該当しない点から、無節式の可能性が高いといえる。無節式であれば、搗き部が円柱状で、屈曲してくびれて握部にいたるCⅠ類に相当

する。ただし、握り部中央が欠損しているため、二節式や単節式である可能性も排除できない。無節式は弥生時代中期前葉～中葉に出現し、同後期～古墳時代に盛行するとされる。なお、二節式は弥生時代前期～中期前葉、単節式は弥生時代前期～中期後葉にみられる（上原編 1993）。また、搗き部端は比較的平らであるが、中央部がわずかに窪む。使用痕の可能性はある。樹種はヤブツバキである。

16 は杵の腕木である。腕木の中央に柄孔をあけ、支え木端の出柄をさしこんだ「支え木さしこみ式」に分類される（上原編 1993）。腕木の柄孔は貫通している。両端には紐をかけると推定される突起が作りだされている。両端とも突起の内側 3cm 程が削り込まれている。ほかにも、横方向と推定される加工痕が部分的にみられる。腕木の長さは 24 ～ 35cm が大半を占めるのに対し（上原編 1993）、16 は残存長 52cm、復元長 54cm 程度であり大型といえる。なお、『木器集成図録：近畿原始篇』（上原編 1993）では、弥生時代終末期の事例がもっとも古いようである。樹種はヒノキである。

17 は竪杵である。握部中央の 1 か所に節帯を有することから単節式（B 類）に分類される。搗き部はほぼ円柱状であるが、両端近くでわずかに径を減じる。搗き部と握部の境界は屈曲してくびれる。搗き部の握部付近に隆起帯は施されない。搗き部端は片側が丸く、もう片側は比較的平らで中央付近が窪んでいる。このなかに複数のごく浅い窪みが観察され、使用痕と推定される。上述のように、単節式は弥生時代前期～中期後葉に位置づけられる（上原編 1993）。心持材が用いられる。樹種はカキノキ属である。

18 は弓と考えられる。図面上端部は両側辺を削って肩が作り出されており、弓であれば弭となる。弓幹は弭が残存する図面上半は半裁され、断面半円形を呈する。図面下半は節や樹皮を取り除いた程度で、断面は円形である。渡辺一雄（1985）の分類では丸木弓 B に相当する。なお、図面下端は破損しているが、一部平滑な部分がみられる。残存長 68cm であるが、ここに弭が接続したと想定すれば、全長 70cm 程度と推定される。これは全長 1m 以下の短弓に分類されるが、全長の短い事例でも 80cm 程度はあり（上原編 1993）、18 はほかの事例に比べやや短いようである。ただし、平滑な部分が欠損後の再加工などによるものであれば、全長がさらに長くなる可能性もあろう。心持材が用いられる。樹種はマキ属である。

19 は腰掛である。脚付で座板上面を緩やかな中窪みに仕上げていることから、腰掛に分類される。座板と脚を一木で作った刳物（一木式）腰掛である（上原編 1993）。刳物腰掛は基本的に横木取りとされ、19 もこれに該当する。座板の平面形は長方形である。脚は 2 脚であるが、片側の脚は現状で非常に低く不明瞭である。両脚とも座板よりやや内側に作りだされ、残りの良い 1 脚は外側に向けて開く。側面からみた脚の形態は、上辺と下辺の長さが等しい長方形を呈する A 類に分類されるが、中央部はわずかに窪んでいる。A 類は弥生時代～古墳時代に継続し、弥生時代前期～中期後葉においては A 類に限られる（上原編 1993）。座板裏面の脚間は、わずかに削り窪められている。また、脚部に加工痕が認められる。座板の側面から裏面に向け焦げ目がみられる。樹種はクスノキである。

なお、庄・蔵本遺跡第 9 次調査（医療技術短期大学校舎増築地点）の旧河道からも、弥生時代前期前葉の土器に伴って、19 と形態的に類似する刳物腰掛が出土している（北條編 1998）。脚は 19 に比べて明瞭に作り出されその高さも高いが、ほかの形態的特徴は共通する。座板のサイズは、19 が長さ 33cm・幅 20cm、第 9 次調査のものは長さ 24cm・幅 17cm であり、19 が一回り大きい。19 の残存し

ている側の脚の高さは2.5cm程度で、もう片側はほとんど残存していない。第9次調査の脚の高さは4cm程度あり、19の脚も本来同程度の高さを有していたとすれば、かなり使いこまれたことが想定される。

20は槽である。平面が方形もしくは楕円形の浅い容器は、槽・盤とされる。両者の区別は明瞭ではないが、やや深めのものが槽とよばれており、20は槽に分類される。槽・盤は横木取りで、口縁は短辺（木目直交方向）を長辺（木目方向）よりも厚手に仕上げる人が多いと指摘されている（上原編1993）。20も横木取りであり、厚い方が短辺、薄い方が長辺と推定される。その場合、長辺38cm、短辺9cm以上となる。残存部において、底部は平らで台脚はみられず、把手も確認できない。内面の短辺立ち上がり付近に加工痕が確認される。また、長辺の中央に節がみられる。樹種はヒノキである。

21は器種不明である。図面の上側面は弧を描く。平面の下半には、半円形の透かしが連続して施される。一部に加工痕がみられる。樹種はケヤキである。これと形態的に類似する事例として、愛知県朝日遺跡出土の大型臼があげられる⁹。この大型臼は井戸杵に転用されたもので、上下に半裁されており、再加工が施された可能性が指摘されている（図8-6、宮腰編1992）。口縁部から胴部上半の外縁に半円形の透かしが連続して施されているが、本来は口縁部から底部までつながる柱状の把手であった可能性もある。一方、21の断面には、口縁部と外縁の透かし部が二股に分かれる部分は確認できない。また、透かしは朝日遺跡の事例よりも小さい。なお、21の復元口径は36cm程度で、弥生時代～古墳時代における大型臼の口径の範囲（30～60cm）におさまる（上原編1993）。ただし、大型臼は縦木取りが一般的であるのに対し、21は横木取りである点は符合しない¹⁰。ほかに大阪府四ツ池遺跡出土の多脚盤？とされる木製品脚部のモチーフは21に類似している（図8-5、上原編1993）。しかし、これは透かしではなく浮き彫りになっており、口径も23cmで21に比べ小さい。

22は器種不明である。部材であろうか。中位に段が作り出される。この段を境に、上半の方が太く断面楕円形もしくは隅丸方形で、下半は断面長方形に削り整えられる。頭部には斜め方向に段が作りだされている。この段は紐かけの可能性もあるが、紐かけは水平に作り出されたものが多く（上原編1993）、その機能は不明である。上半と下端付近に、非貫通の孔がみられるが、人為的なものではなく、節が抜けた痕と考えられる。樹種はヒノキである。

23は容器である。横木取りの分割材の心を除去し（心去材）、節や樹皮が取り除かれている。木の心側を平らに成形し、その中央が削り窪められている。削り窪められた部分は、中央ではなく、図面上側の短辺に寄っており、平面形は上の肩が隅丸方形、下の肩が半円形を呈する。さらに、上側短辺の立ち上がりに底まで貫通する孔が認められ、これは節が抜けた部分と考えられる。細部を整形した痕跡は看取されない。上面から側面にかけ広い範囲に焦げ目が認められる。完成品か未成品かは不明である。なお、削り窪められた部分が中央より図面上に寄り、下の肩が半円形を呈する点から、製作途上の可能性もある。また、節が抜けたタイミングが製作途上であれば、製作が放棄された可能性もあろう。樹種はヒノキである。

24は器種不明である。板材であろうか。短辺の片側が先細りになっており矢板の可能性もある。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

表1 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品一覧

No.	調査 次	調査区 グリッド	遺構	層位	出土遺構埋土の時期幅 (中心時期)*	器種	器種備考	焦げ 目	樹種**	遺物の時期幅 (中心時期)	整理 No.	箱 No.
1	27	西区F-9	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	高杯	杯部. 組合せ式. 水平口縁.	有	クスノキ	弥生時代中期	76	14
2	27	西区F-9	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	容器?	有	ヤマグワ		77	8
3	27	西区F-8	旧河道 S263	3層	弥生時代前期末・中期初頭～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	泥除(未成品)			コナラ属アカガシ垂属	弥生時代中期～5世紀(弥生時代終末期～古墳時代前期)	7	7
4	27	西区F-8	旧河道 S263	3層	弥生時代前期末・中期初頭～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	狭楕			コナラ属アカガシ垂属	弥生時代前期～5世紀(弥生時代前期～中期後葉)	8	7
5	27	西区F-6	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	編み籠			広葉樹. 草本?		60	
6	27	西区E-8	旧河道 S263	5・6層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭～中期後半)	戈形			ヒノキ	弥生時代中期前葉～後葉	146	8
7	27	西区F-9	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	柱状片刃石斧柄?曲柄鍬柄?鳥形?		カギカズラ属		78	8
8	27	西区F-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明			イヌガヤ		64	8
9	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	高杯	脚部. 一木式?杯部一部残存.	有	ヤマグワ	弥生時代前期～中期(弥生時代前期)	13	7
10	27	西区F-3	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	横槌			ヤブツバキ		54	15
11	27	西区D-8	旧河道 S263	6層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭)	栓	身に柄穴.		ヒノキ		163	10
12	27	西区E-8	旧河道 S263	5・6層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭～中期後半)	曲柄平鍬			イスノキ	弥生時代中期前葉～4世紀	147	9
13	27	西区E-9	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	広楕(未成品)			コナラ属アカガシ垂属		49	9
14	27	西区F-7	旧河道 S263	5層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭～中期後半)	広楕			コナラ属アカガシ垂属	弥生時代前期～中期前葉	137	9
15	27	西区F-7	旧河道 S263	5層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭～中期後半)	竪杵			ヤブツバキ	弥生時代前期～古墳時代	138	9
16	27	西区F-5	旧河道 S263	6層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭)	杵	腕木.		ヒノキ	弥生時代終末期～	164	10
17	27	西区F-5	旧河道 S263	6層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭)	竪杵			カキノキ属	弥生時代前期～中期後葉	165	14
18	27	西区F-7	旧河道 S263	5層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代前期末・中期初頭～中期後半)	弓?			マキ属		139	8
19	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	腰掛	刳物. 2脚.	有	クスノキ	弥生時代前期～古墳時代(弥生時代前期～中期後葉)	14	7
20	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	槽			ヒノキ		15	7
21	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	臼?容器?		ケヤキ		16	7
22	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	部材?		ヒノキ		17	7
23	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	容器		有	ヒノキ		18	15
24	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	板材?		コナラ属アカガシ垂属		19	8
25	27	西区D-7	旧河道 S263	4層	弥生時代前期中葉～後期後半・終末期(弥生時代後期後半・終末期)	不明	棒材/板材?	有	コナラ属アカガシ垂属		20	8

* 三阪2017による ** 渡邊・金原2017による

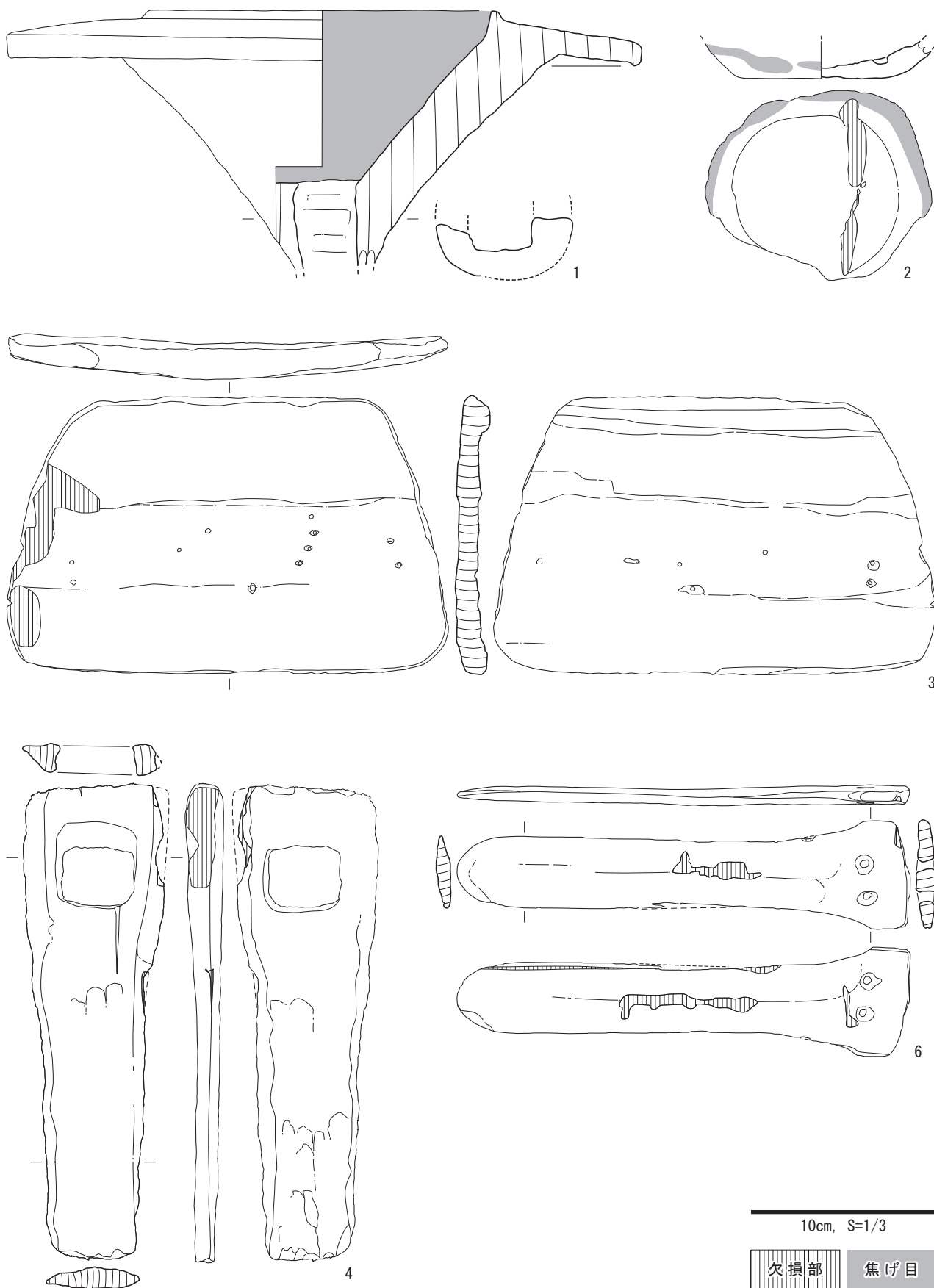


図1 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(1)

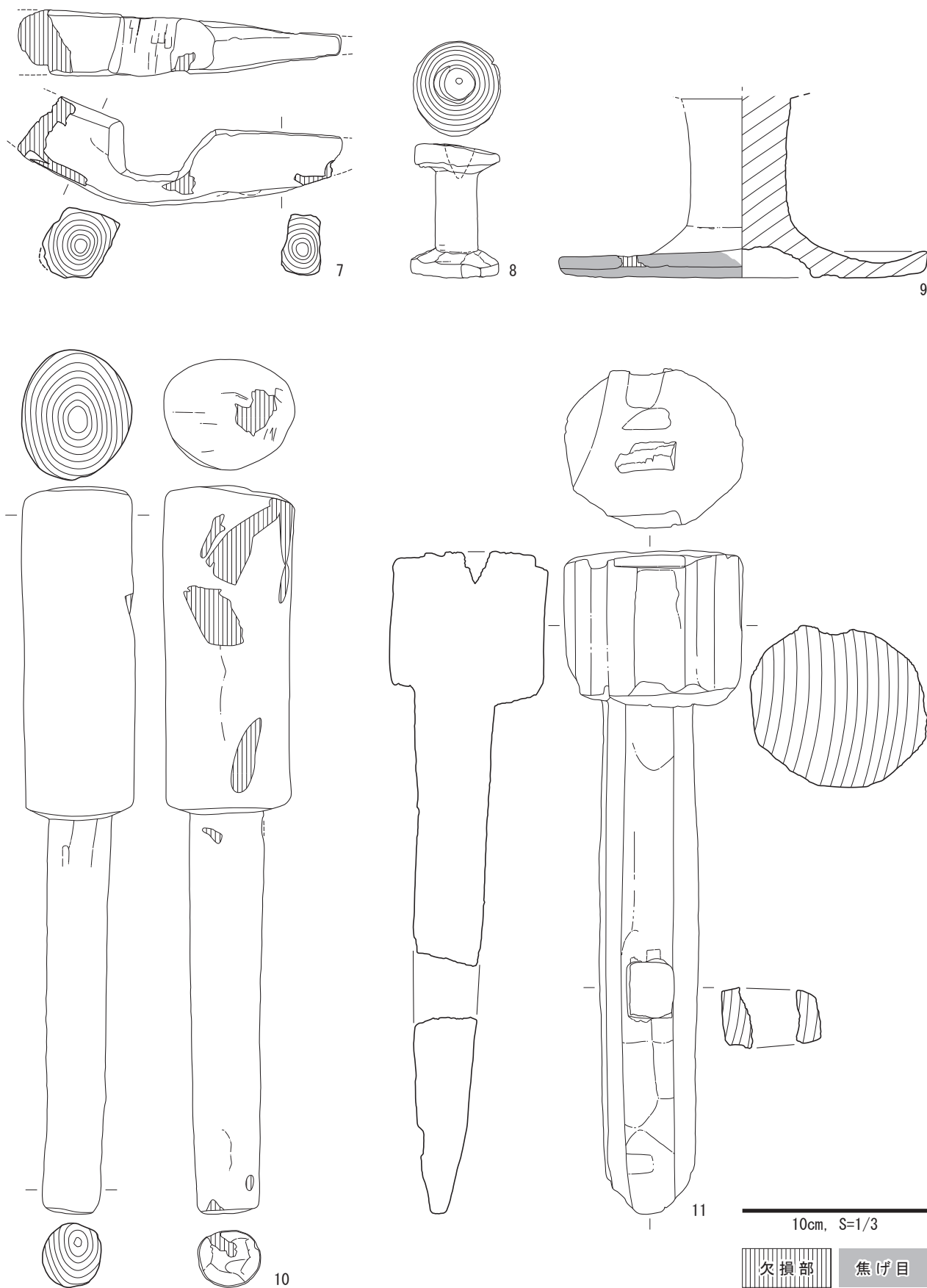


図2 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(2)



図3 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(3)

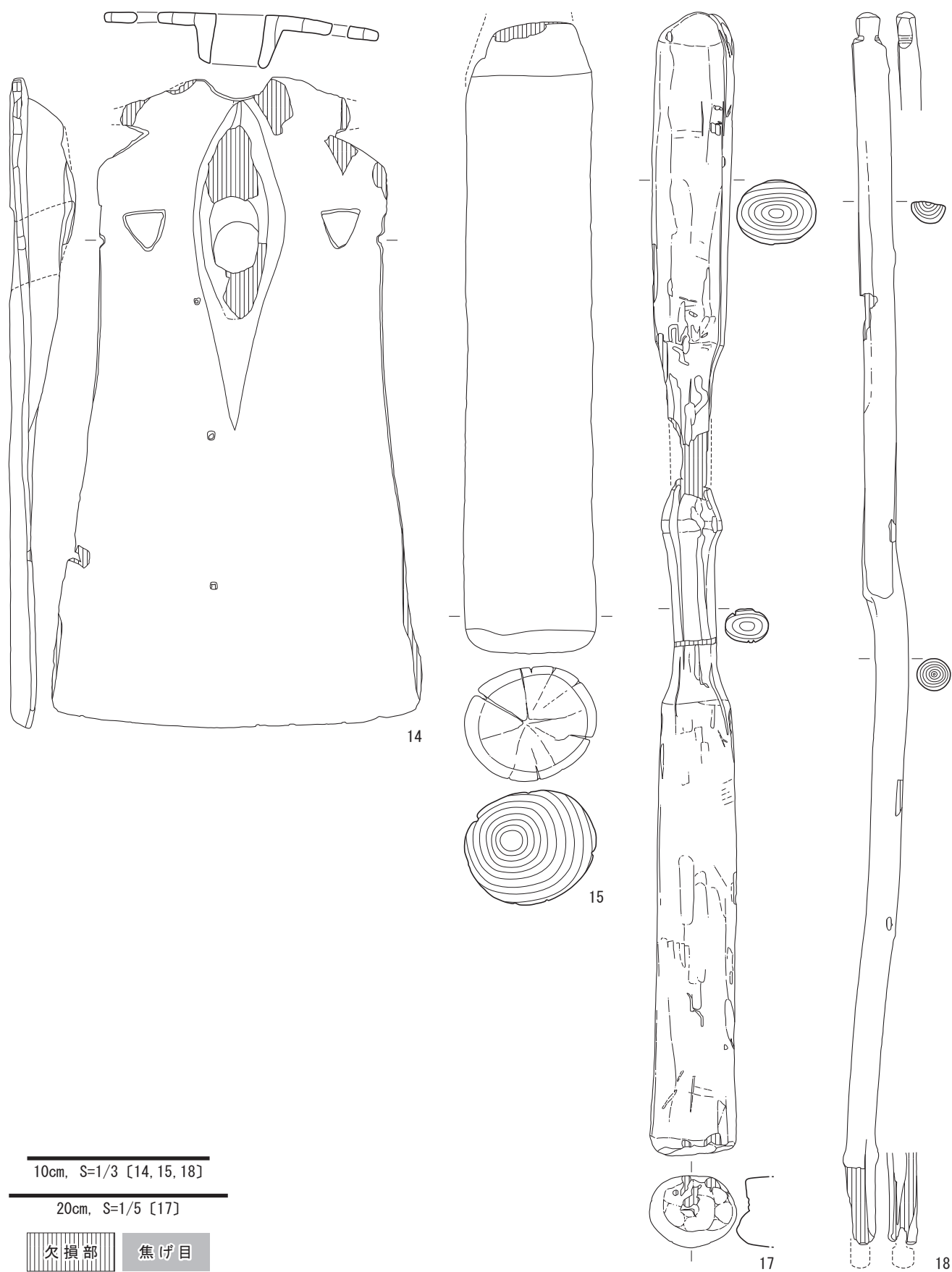
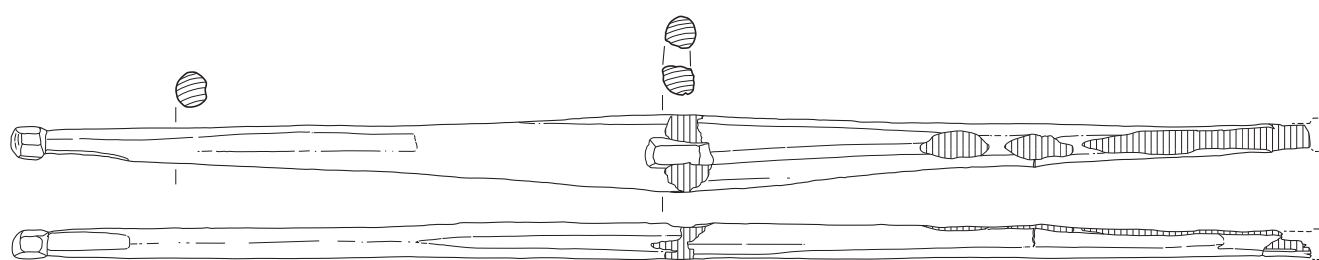
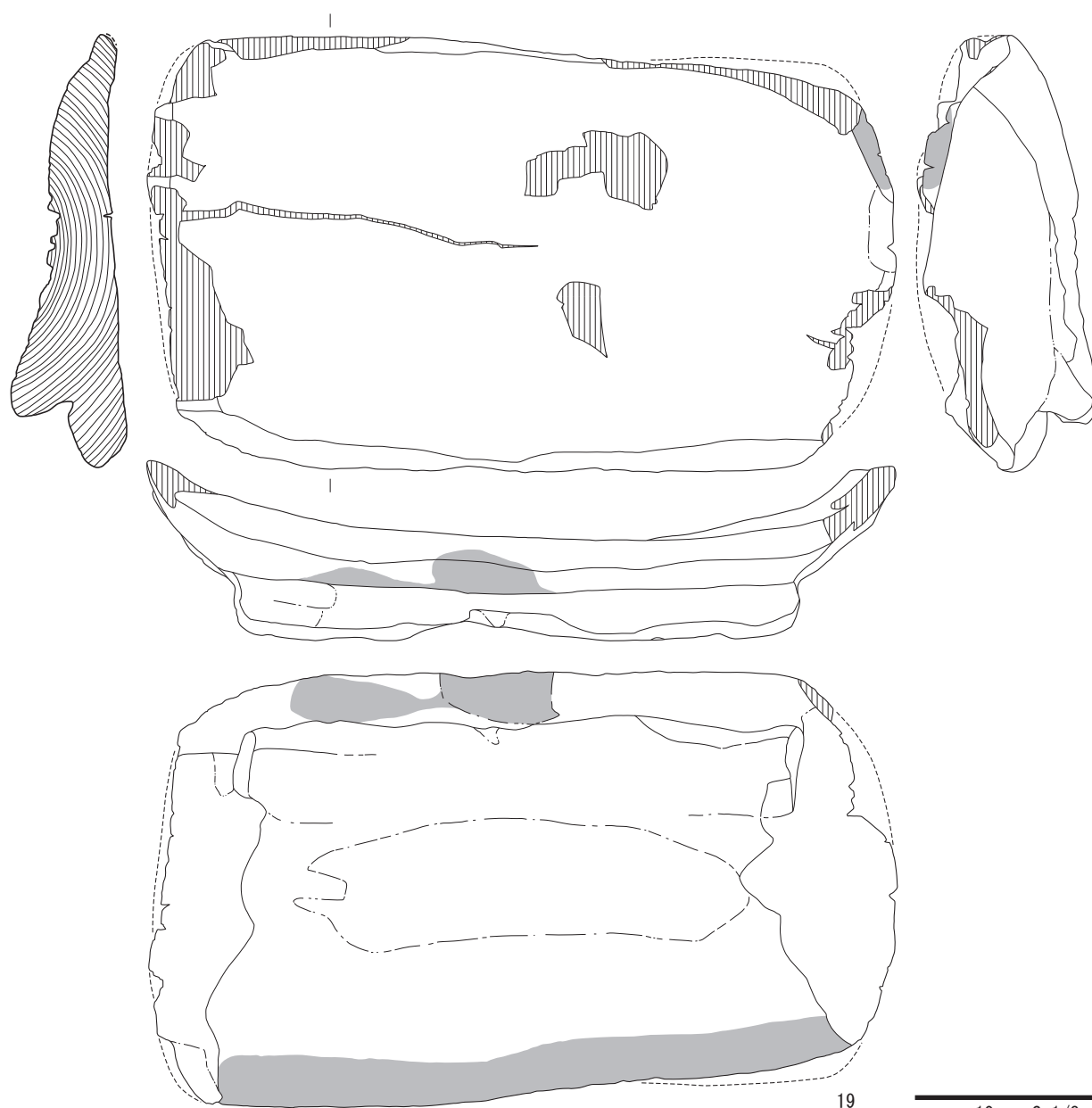


図4 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(4)



16



19

10cm, S=1/3



図5 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(5)

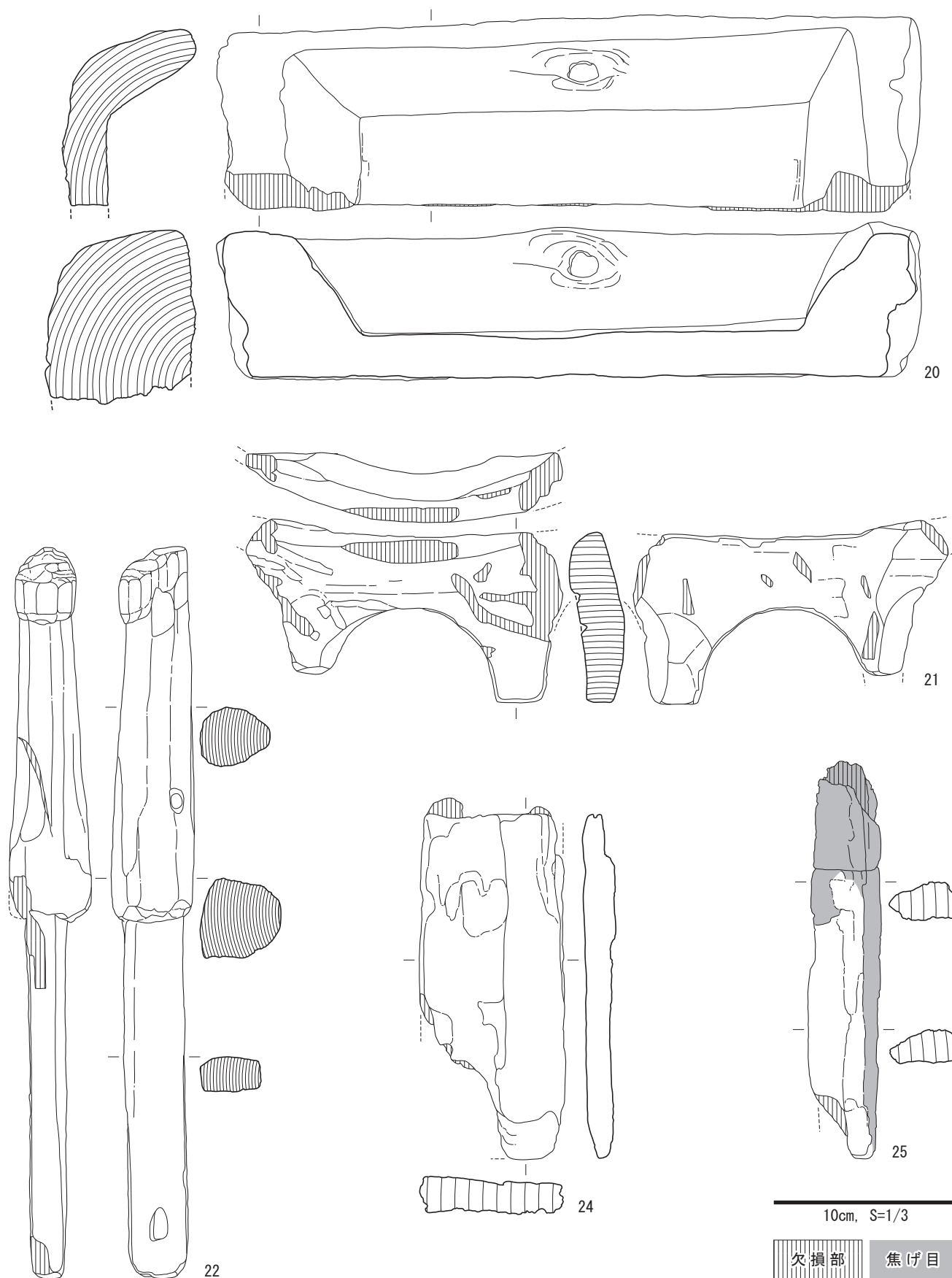


図6 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(6)

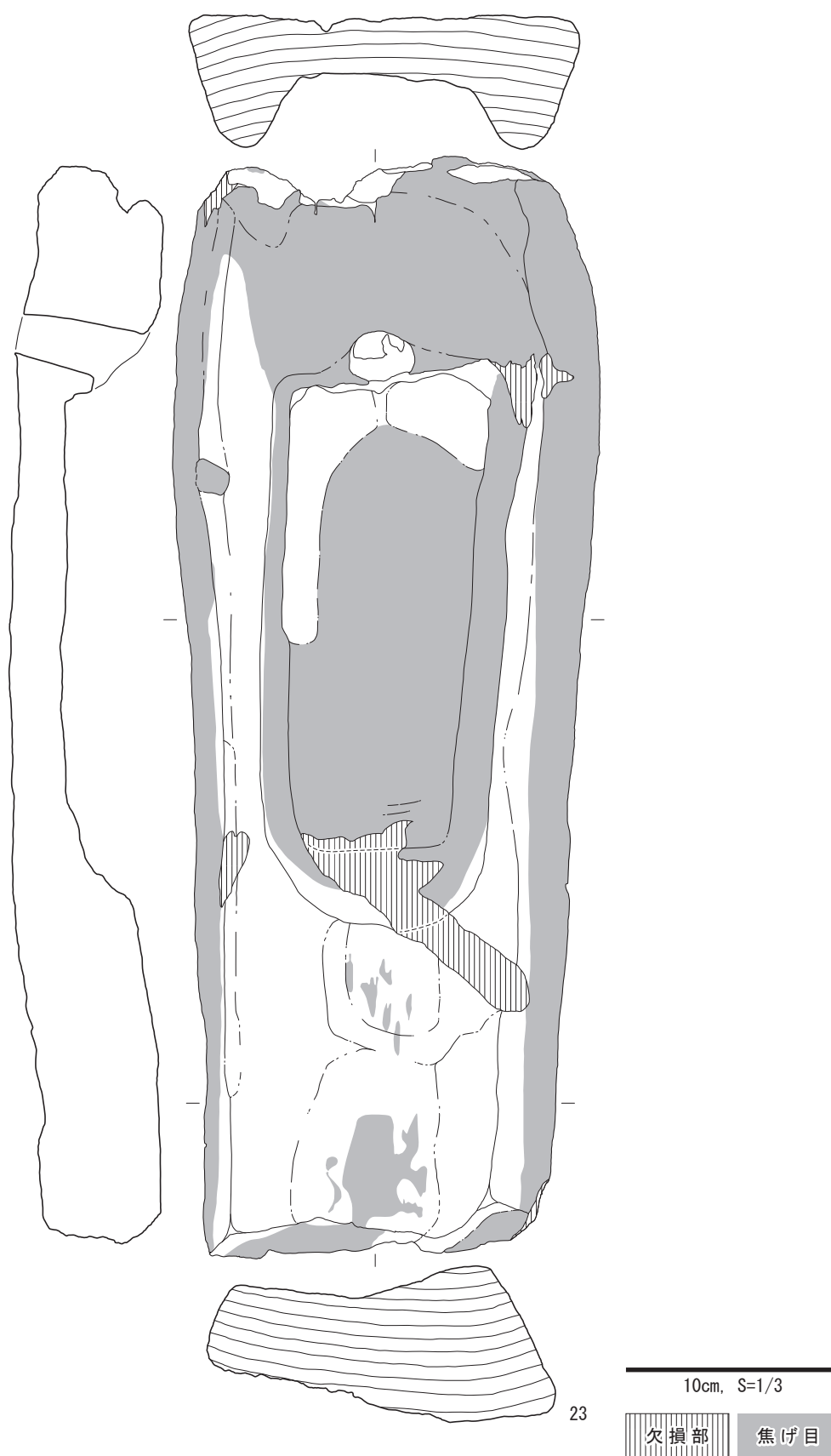


図7 庄・蔵本遺跡第27次調査出土木製品実測図(7)



図8 他遺跡における類例

1・6 愛知県朝日遺跡（宮腰編 2003） 2 大阪府池上遺跡（上原編 1993） 3 愛媛県福音寺遺跡竹ノ下地区（森・黒崎 1983） 4 奈良県平城宮下層遺跡（上原編 1993） 5 大阪府四ツ池遺跡（上原編 1993）

25 は器種不明である。棒材や板材もしくは、何らかの木製品の破片の可能性もある。横断面は不整二等辺三角形を呈する。短辺の片側に焦げ目がみられる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

註

- 1 本調査地点の概要は既報告であるが（端野ほか 2015）、現在も正式報告書の刊行に向け整理作業を進めている段階である。
- 2 本来は保存処理前に実測をおこなうべきであるが、本稿では処理後に実測したものを掲載している。この点について、ご容赦いただきたい。
- 3 古環境研究所（現・文化財科学研究センター）より、杯内面の黒色部が黒漆ではなく焦げ目であることをご教示いただいた。
- 4 中原計氏よりご教示いただいた。
- 5 森岡秀人氏よりご教示いただいた。
- 6 註 4 に同じ。
- 7 註 4 に同じ。
- 8 註 4 に同じ。
- 9 註 4 に同じ。
- 10 註 4 に同じ。

謝 辞

小稿の執筆にあたり、中原計氏（鳥取大学）には、木製品を実見のうえ、器種や類例をご教示いただくなど、多大なご協力をえました。図面の実測・トレースにあたり、井本尚子氏・岸本多美子氏・板東美幸氏・山本愛子氏（本調査室・技術補佐員）にご協力いただきました。また、下記の方々から有益なご助言をいただきました。記して御礼申し上げます。

小林和貴・佐々木由香・鈴木三男・中村豊・能城修一・村上由美子・森岡秀人（敬称略・五十音順）

文 献

- 福岡市埋蔵文化財センター, 1983. 埋蔵文化財研究会第 14 回研究集会資料: 木製農具について. 埋蔵文化財研究会, 福岡.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点）の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 43-97.
- 北條芳隆編, 1998. 庄・蔵本遺跡 1: 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査室.
- 伊東隆夫・山田昌久（編）, 2012. 木の考古学: 出土木製品用材データベース. 海青社, 滋賀.
- 岩永省三, 2003. 武器形青銅器の型式学. 考古資料大観第 6 巻: 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品, pp. 242-252, 小学館, 東京.
- 金原裕美子・田中友貴恵, 2017. トレハロース含浸法による木製品保存処理. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 45-53.

- 三阪一徳, 2017. 庄・蔵本遺跡の年代測定試料と炭化鱗茎付着土器. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 89-96.
- 宮腰健司 (編), 1992. 朝日遺跡Ⅲ. 愛知県埋蔵文化財センター.
- 宮里修, 2014. 四国の青銅器模倣品. 青銅器の模倣Ⅰ: 第 63 回埋蔵文化財研究集会, pp. 55-66. 埋蔵文化財研究会第 63 回埋蔵文化財研究集会実行委員会, 福岡.
- 森光晴・黒崎直, 1983. 国道 11 号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 福音寺遺跡(竹ノ下・川付・筋違) 星ノ岡遺跡(旗立・北下) 北久米遺跡(常堰・乃万の裏・農免). 松山市教育委員会.
- 長友朋子, 2009. 弥生時代の食器組成の変化と食器生産. 木・ひと・文化: 出土木器研究会論集, pp. 77-93. 出土木器研究会, 福岡.
- 中原計, 2003. 木製品における弥生時代前期の画期: 広鋏Ⅰ式の製作工程の変化を中心に. 待兼山論叢史学篇 37, 27-50.
- 中原計, 2006. 弥生時代の泥除けとその利用木材の変化. 青藍 3, 1-14.
- 難波洋三, 1986. 戈形祭器. 弥生文化の研究 6: 道具と技術Ⅱ, pp. 119-122. 雄山閣, 東京.
- 能城修一・村上由美子・小林和貴・鈴木三男, 2017. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査から出土した弥生時代の木製品類の樹種. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 11-28.
- 小野久隆・奥野都, 1978. 池上遺跡第 4 分冊. 大阪文化財センター.
- 島地謙・伊東隆夫 (編), 1988. 日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, 東京.
- 島根県立古代出雲歴史博物館, 2012. 弥生青銅器に魅せられた人々. ハーベスト出版, 島根.
- 菅原康夫・瀧山雄一, 2000. 阿波地域. 弥生土器の様式と編年: 四国編, pp. 11-130. 木耳社, 東京.
- 上原真人 (編), 1993. 木器集成図録: 近畿原始編. 奈良国立文化財研究所.
- 渡邊英明・金原裕美子, 2017. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土木製品における樹種同定. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 55-65.
- 渡辺一雄, 1985. 弓・矢. 弥生文化の研究 5: 道具と技術Ⅰ, pp. 165-172. 雄山閣, 東京.
- 渡辺誠, 1989. ヨコヅチをめぐって: 考古資料と民具. 民具が語る日本文化, pp. 157-180. 河出書房新社, 東京.
- 山田昌久, 2003. 考古資料大観第 8 巻: 弥生・古墳時代 木・繊維製品. 小学館, 東京.